



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	学習者のニーズに即した教室活動：読解クラスでの試みから
Author(s)	市川, 明美; 梅田, 悦雄; 富田, 麻知子 他
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 10, 88-101
Issue Date	2006-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45663
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC010_005.pdf



学習者のニーズに即した教室活動

ー読解クラスでの試みからー

市川明美・梅田悦雄・富田麻知子・山田智久

要 旨

初級の学習者を対象とした読解授業は文型学習の仕上げと位置づけられることが多い。しかし、特に日本国内に居住する学習者にとっては、習得文型の応用としての教室活動のみでは、実生活における読む活動のためのトレーニングとして十分とはいえない。

そこで本稿執筆者らは、北海道大学留学生センターの一般日本語コース及び集中日本語コースで初級読解授業を履修している学生達のニーズを分析し、そこから引き出される結果に応じた、学習者の実生活に役立つ読む活動およびそのための教材開発に取り組んできた。このことにより、初級の読解クラスの中により学習者のニーズに即した要素を加えるためである。また、未知の語彙、文型を含んだテキストを、周辺知識や推測能力を利用しながら読む練習をすることで、その活動が学習者の自主的な活動に結びつくよう配慮した。

〔キーワード〕：ニーズ、周辺知識、推測能力、自主性

1. はじめに

初級の学習者は語彙・文法の知識が少なく、中級以降の学習者に比べて限られた範囲内でしか文章理解ができない。したがって初級における読む活動は、未知の文章を読んで内容を理解していくというより、ある習得文型の応用、文型学習のまとめとして捉えられることが多かった。従来の初級読解教材を概観しても、その多くが、文法授業で習ったことの応用練習として作られている。¹⁾つまり、読み物を学習者の文法学習の進度に合わせ、学習者から「わからない」という不満が出ないように、語彙・文型を調整し、ルビをふるなどして素材を極度に簡素化し、授業で扱い易いように調整している。

しかし、実際全ての学習者が習得文型の応用のような学習過程を望んでいるかという、必ずしもそうではない場合も多い。たとえば本稿執筆者

らが担当する読解クラスでは、まだ日本語が読めない学習者から「A T Mはどう使うのか。画面に表示されている文字の読み方を教えて欲しい」あるいは「宗教的な問題があるので、食品成分表で使われている表記について詳しく教えて欲しい」など、実生活において必要性の高い要望が必ずと言っていいほど聞かれる。初級の読む活動の枠内で、このような要望に応えることは少ないであろう。なぜならば、文法のまとめとしての傾向が強い初級の教室活動では、必要な文型・語彙を学習していないからという理由で先延ばしにされるからである。だからと言って、A T Mの使い方や食品成分表を理解できるようになるまで、それらを避けて生活するのは困難であるといわざるをえず、現実には学習者は個別に試行錯誤しながら対応しているというのが現状である。

そこで本稿執筆者らは、学習者の中に生まれてくる動機と教室での読む活動とを関連付けられないかと考えた。換言すれば、学習者のニーズに沿うことにより、教室活動と実際の言語活動とを密接に結びつけ、実生活で行う読む活動のためのトレーニングを提供する授業ができるのではないかということである。そのため、試験的にはあるが、学習者のニーズに対応する教材とそれによる活動を授業に組み込んだ。その際、単なる語彙学習にならないように成人学習者の母語において保持している周辺知識や推測能力を利用することにも重点を置いた。そして、これらが教室外での学習者の自主的な読む活動につながるトレーニングとなるように配慮した。

本稿では、初級の学習者に対し以上のような観点を元に計画され、実施された教室活動について報告する。なお本稿は、執筆者らが担当する読解授業全てについての報告ではないことをお断りしておく。

2. 先行研究

「1.はじめに」で述べたように、教室活動と実生活を密接に結びつけて読む活動のためのトレーニングを提供するためには、習得文型のまとめとしての読解だけでは十分とはいえない。読解授業と教材に関して、宮谷（2005：168）は、「これまでの『読む』教材は、文型積み上げ式の理念に沿った『無目的な文法』が含まれた素材集であり、文章中の文法・語彙を学習することが読解教育であると取り違えられてきた。」と述べ、読むことそのものに焦点を当てた授業の必要性を訴えている。

また、池上（1996：1）でも「初級から中級の前半の段階で行われる読解指導では読むという言語活動は手段であり、主目的は語彙や文型の練習

であって、読解能力自体を養成する練習はそれほどなされていない。」

と同様の問題点を指摘したのち、さらに「そこで行われる読みは一語一句の意味を確認しながら成されるいわゆる『逐語読み』だということに注意したい。逐語読みが基本的に必要な読み方であるのは言うまでもないが、半面、①学習者が実生活の中で要求される読みに際して役立たない②学習者が第一言語において既有的読解技能を利用することができない」と、読む活動の実用面に関する配慮と学習者の既有能力の利用という二つの面での欠如を問題にしている。

しかし、どのような活動を行なえばこれらの問題点が解消されるのかについては、具体例をあげた研究を目にしない。また、学習者のニーズに応じた教材開発という点においても、教師が担当授業のために個別に教材を作成使用しているというのが現状であろう。

3. 文型学習のまとめとしての授業の問題点

一般的に文型学習のまとめという目的で行われる読む活動では、学習した文型が多用された読み物を使って、文型を復習しながら内容理解をさせるものが多い。このような授業で使われる典型的な文章を以下に挙げる。

<都会の生活と田舎の生活>

都会は、とてもにぎやかです。お店がたくさんありますから、便利です。でも、とても忙しいです。そして、食べ物も家賃もとても高いです。都会の生活は大変です。

田舎にはお店があまりありませんから、あまり便利じゃありません。でも、田舎は静かです。そして、人はとても親切です。家賃はとても安いです。

※都会 city 生活 life 田舎 country お店 shop 家賃 rent

●正しいものに○、まちがっているものに×をつけなさい。

○ : true × : false

(1) [] 都会には、お店があまりありません。

(2) [] 都会の家賃は高いです。

(3) [] 田舎は、静かです。

文法の授業で形容詞を導入したあとこのような読み物を読ませ、正誤問題で内容理解を確認するというのが、上掲の教材の典型的な使い方だと考えられる。

上に挙げた教材は我々の作成例であるが、同様の授業を想定して作られたと思われる市販教材（例えば『楽しく読もうⅠ』や『みんなの日本語初級Ⅰ 初級で読めるトピック25』など）も見られる。我々の作成例においても市販の教材においても、これらを習得文型のまとめの活動として考える限りにおいては、その有効性を疑うものではない。しかし学習者が成人であり、授業の目的が読みの練習であることを前提とした場合には、以下のような問題がある。

- 1) 内容が過度に単純化されていて、学習者にとって意味のある内容が含まれていない。
- 2) 学習者の興味やニーズに合わせた活動がしづらい。
- 3) 実生活における読む活動のために必要なトレーニングができない。

そこで、我々はまず日本に住む学習者が日常生活において何を読む必要があるのかについての調査を行った。次章では学習者に対して行ったニーズ調査について報告する。

4. 学習者のニーズ

日本で生活する学習者は日常、どんなものを読んでいるのだろうか、または読まなければならないのだろうか。学習者のニーズを調査するため、北海道大学留学生センターの一般日本語コース²⁾と集中日本語コース³⁾の初級読解クラスを受講している学習者を対象に、これまでの授業の中で学習者より挙げられたニーズを参考にして項目を作成し、アンケート調査を実施した。⁴⁾

対象者：一般日本語コース 5名・集中日本語コース 24名

アンケート内容：

下記にあげた項目の中からこの授業の中で獲得したいスキルに複数選択可能として○をつけさせた。なお各項目には英訳をつけた。

選択項目：各項目の（ ）内の数字は希望者数である。

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| a) A T Mの使い方 (11) | b) Windows 日本語版の使い方 (10) |
| c) 食べ物情報 (12) | d) 電子辞書の使い方 (18) |

- e) 申込書の書き方 (16) f) 乗り物関係 (14) g) メニュー (10)
h) 看板など (6) i) ゴミ分別 (6)

結果を見ると、日本で生活する上で緊急性の高い項目が上位に選ばれている。つまりお金や食べ物、交通手段、さらにはさまざまな手続きに関する書類や辞書の使い方などである。日本に住む学習者は、教師の想像する以上に緊急性の高い「書かれたもの」に取り巻かれて生活している。初級の読解クラスにおいて、これらを読む授業をすることで学習者のニーズに応え、彼らの日本での生活の一助となることもできるのではないだろうか。

5. ニーズに即した教室活動

本稿で紹介する授業は以上の結果を踏まえた上で、実生活での学習者の読む活動を考慮した作業が行えるよう計画された。教室活動を考える上ではさらに、以下の先行研究を参考にした。

池上 (1993) では、「読解という言語行動は、読者（ここでは学習者）が自ら持ち合わせている知識や想像力を使って、書かれている内容について想像しイメージを作っていく作業であるといえる。この作業の中では、文字の読み方や語彙の意味を細かに理解することよりは、むしろ、書かれている内容についての全体的なイメージを持つことの方が大切になってくる。」と述べられている。また Tomlinson (1998: 277) も、それら読解作業について以下のような見解を述べている。

「学習者が何かを読む際に、頭の中に『映像』を想起できない場合、読解作業は困難かつ、つまらないものとなる。そのような場合読解作業そのものがつまらないというだけではなく、学習者がL1で保持している認知能力をL2での読解作業に転用することも難しくなる」(執筆者訳)

このように、学習者の読むという活動は、ただ単に文字をデコードし文法に当てはめていくだけの単純作業ではなく、学習者の頭の中に映像を想起する、もしくは内容をイメージとして捉え、さらにそれをすでに保持している知識と照合する作業を含む必要がある。

そこで、教材には学習者が日常生活で目にするであろう素材を用いることで、全体的なイメージをつかみやすくする。そして授業の中で、学習者が持つ既有知識や推測能力を使い、どこに何が書かれているかとい

う見当をつけながら素材に向かえるようにすることも重要であろう。このことはさらに、教室内での学習を実際の生活での学習者の自主的な読む活動にもつなげ得ると考える。

学習者のニーズに基づいた上で読むことに必要なトレーニングを行い得る教室活動を考えると、以下のようなものになる。

- 1) 教材として、学習者のニーズに基づいて選ばれた学習者の身のまわりにある素材を扱う。
- 2) 自分に必要な情報のみを得るために、必要な部分のみを選び出し、不必要な部分は捨てる読み方を重視する。
- 3) 未知の語彙、文型を含んだ素材を学習者の周辺知識や既有知識を利用し、推測能力を働かせながら読む活動を重視する。

次に、2つの授業例を紹介したい。紹介する授業例はゼロスタートの初級者を対象とした授業であり、学習者の文字への不安を拭い去り、日本での生活において必要不可欠な情報を読むことを中心としたものである。

授業例1では、上記にあげた教室活動のうち、2)で挙げた自分にとって不必要な部分は捨てるという視点に立って行われた、食品成分表を使った授業を紹介する。そして授業例2では、3)で挙げた学習者の推測能力を働かせるという視点で行われた、ATMの画面を使った授業を紹介する。

6. 授業例

6-1. 授業例1

1) 授業内容

教材：今回紹介する授業例で使用した教材は、食品の名称、原材料名、内容、量、賞味期限などが記載されているラベルである。食品に関する情報は、「4. 学習者のニーズ」でも述べたように、学習者からの要望が多いものである。特に、宗教やアレルギー上の理由から摂取できない食べ物がある学習者にとっては、日常生活を送る上で必須の情報となる。以下の授業においてはイスラム圏の学習者が履修していたことから、宗教上食べられない食品に関連した素材を使って授業を進めた。

目的：自分にとってのタブーフードが入った食品を見つけられるようになる

対象者：集中日本語コースの初級読解クラスの受講生

学習者のレベル：ひらがな、カタカナ導入直後の初級レベル

2) 授業の流れ

①食べ物語彙の説明

パワーポイントやピクチャーカードを利用して、食べ物語彙の提示をする。例えば「豚肉」という語彙を扱う場合、実際の食品成分表には「豚肉・ぶたにく・ポーク」という異なる語種や表記法で書かれていることが考えられるので、考えられる全種類の文字形式を提示する。

②プレタスク

アレルギーや宗教の話をし、食べられない物はないかなどの質問をする。日本の食べ物に関して話すことで、授業への動機付けを行う。

③カップラーメン成分表の例の紹介

写真や絵などを使い、成分表が読めなければ中身を確認できないものに、宗教上の理由やアレルギーなどにより、それぞれの学習者が摂ってはいけない食べ物が含まれていることを知らせる。学習者から漢字が読めないからわからないという意見が出そうであるが、ここで大切なことは、交通標識や看板の絵のように情報を表す「形」として文字を扱うことを重要視し、書かれているものを一文字一文字覚えていくような活動ではないことを確認する。今の段階ではタブーとされる食品の文字を「形」として捉え、各自が摂ってはいけない食べ物を避ける練習だということを強調する。これは、漢字やひらがなを見たとたん、まだ勉強していないから読めないと考えてしまう学習者がいるためである。

④ラベルに見られる文字のしくみの説明

例) カレーの食品成分表

品名	カレー
原材料名	カレールウ(小麦粉、 <u>牛脂</u> 、砂糖、カレー粉、食塩、 <u>豚脂</u> 、 でん粉、 香辛料、ビーフエキス、トマト) <u>豚肉</u> 、野菜
内容量	220グラム
賞味期限	07.10.08

このような食品成分表を提示した後、次のように文字のしくみを示す。

豚 a pig (ぶた) 肉 meat (にく)
(豚 a pig + 肉 meat = 豚肉 pork) (ぶたにく)
牛 a cow (ぎゅう・うし)
(牛 a cow + 肉 meat = 牛肉 beef) (ぎゅうにく)
鶏 a chicken (とり)
羊 a sheep (ひつじ)
脂 fat

「牛肉」は①の食べ物語彙の説明時に確認しているので、ここで提示してもその意味は理解できる。例示したラベルに実際に出てくる「牛脂」を「ぎゅうし」と読めなくても、「牛＝COW」＋「脂＝FAT」＝「COW FAT」であると、文字を見て意味がわかる。

- ⑤タスク：実際の食品成分表から、「ポーク／ビーフエキス／ゼラチン／豚／牛／肉／エキス」を探す。

④までに習ったことの確認として、フォントの違いも意識できるような生教材を使って、習った語彙を見つける作業を行う。その理由として、多くの学習者は、教科書体で印刷された「豚」という文字と明朝体で書かれた「豚」という文字を異なるものとして認識する傾向にあるという授業内での観察がある。実生活において目にする食品のラベルは様々なフォントで印刷されているのが常であることを考えると、数種類の生教材を用いてフォントの違いも認識させておく必要がある。

⑥実践タスク

最後に、実践タスクとして大学生協やスーパーなどへ行き自分の食べられないものが含まれている食品を探すタスクを行う。

上記のようなタスクは、教室内での活動と実際の言語活動をつなげ、教室外での学習者の自主的な読解活動を可能にすると考える。

3) 授業を振り返って

①の段階で、教師が提示している途中で、学習者は自ら覚えたい語彙を

ローマ字で記録したり、自分の知りたい語彙について日本語で何と云うかなどの質問をしてきたりした。これはこの段階で学習者から「情報を得たい」という欲求を引き出すことができた結果だと考える。

また、学習者から漢字やカタカナなど、未習文字への不安は出なかった。③の段階で教師側が文字を一種の「形」として捉えようと言っているので「同じ形を見つける」というパズルのような感覚で作業を行っていたのだと思われる。学習者は、ここで学んだ「形」を食品成分表以外の何かで見たときに、既習知識や推測能力を働かせ何が書かれているのかを類推するであろう。

この授業を行った後、自分でタブーフードの語彙リストを作成し、買い物のときに持ち歩いているという学習者がいた。これは、本実践の狙いである自主的な学習につながる意味のある活動であったのではないかと考える。

今回の授業で学習者は、漢字だから読めない、カタカナだから難しいという気持ちから解き放たれ、不必要な部分は捨てる読み方、裏を返せば自分にとって必要な文字だけを選択する読み方もあるということに気づいたのではないと思う。それだけでなく、実生活において不可欠な自力で行わなければならない必要な買い物をするために「読む」という活動の目的を達成したと考える。

次に、学習者のニーズ調査で要望の多かったATMの使い方を教材とした授業例を報告する。

6-2. 授業例2

1) 授業内容

教材：食品の情報に関するものと同様、ATMの使い方に関する要望も学習者から非常に多く聞かれる。そこでATMの画面を再現したものをパワーポイントで提示し、そこからATMの使い方を理解させた。

目的：ATMの使い方の理解を通して、文字認識の推測能力を伸ばす。

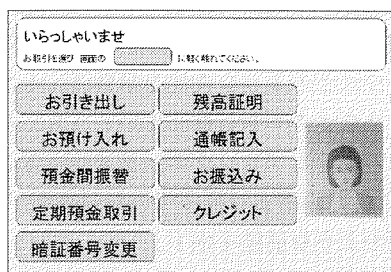
対象者：集中日本語コースの初級読解クラスの受講生

(授業例1の対象者と同じ)

学習者のレベル：ひらがな、カタカナ導入直後の初級レベル

2) 授業の流れ

① A T M画面の提示



上掲のA T M画面を用いて全てを説明するのではなく、まずはグループで推測する作業を行う。すると、それぞれの学習者が持っている既有知識がぶつかり、さまざまな意見が出る。例えば、「なぜこんなにボタンが多いんだ」や「一番使うボタンが上にあるはずだ」、「いや私の国ではそうではない」などがそれである。これらのような意見は必ず出てくるが、重要なことは次の段階、つまり推測能力を働かせる段階である。

②推測能力を活用した活動

どの学習者も既有知識を保持し、また、日本で何も見ないで生活しているわけではない。そこで、学生らに「お金を引き出すにはどのボタンを押せばいいだろうか」と、ボタンの説明をせずに、学習者に問いかける形とした。その結果、「『引』」という字は、ドアに書いてあるから、Push か Pull であろう。どちらかであれば現金を Pull であろう。「出」という字も地下鉄の出口などで目にするから、Out や Exit という意味ではないだろうか。きっと「引き出す」というボタンが Withdraw なのではないか」と時間はかかっても答えへと自主的にたどり着くことが出来るグループが多い。重要な点は、以上のタスクをグループで行うということである。個人では産出不可能な知識をグループの中で話し合うことで（日本語でも英語でも可とする）答えが導き出される可能性が格段に高まるのである。

③ A T M画面で使用されている語彙の説明

推測をさせた後に、初めてどのボタンがどのような役割を持っているのかについてクラス全体で正解を確認する。その際に不正解の答えもただ不正解と伝えるのではなく、なぜ不正解となったのかについてもクラ

ス全体で考える。そのことにより、学習者が保持している自国の文化と日本の文化の間にある違いも認識させられると考える。

3) 授業を振り返って

以上、A T Mの使い方に関する授業について紹介したが、このような授業は、時間が経つにつれどのような変化を学習者にもたらすかについても述べたい。上記のようなタスクをこなしていくうちに学習者の中に推測能力を働かせる「勘」のようなブラックボックスが形成されていくと予想する。残念ながら確証を得る段階まで至っていないのだが、そのブラックボックスは学習者に以下のような活動を促す。

- ①自分が知りたい、もしくは自分に必要な情報は、何であろうか。
- ②知りたい情報に表示されている文字は、どのような場面で目にするか探す。

A T Mのほかに具体例を挙げる。ある学生が携帯電話の契約をしたい場合に申込書を手にしたとする。初級学習者では理解し、記入することは到底不可能である。通常であれば、日本人に助けを求めるなり、日本語が分かる母語が同じ友人に聞くなどの方法があるであろう。このような状況においてもまずは、自分が必要な情報は何なのか、換言すると自分が行う行動のために必要な情報は何なのであるかと考えることが第一段階となる。申込書の場合は、何を記入するのかを自分が持っている既有知識といったん照らすということになるであろう。続いて、推測である。最初に書くものは名前なのか年齢なのか、名前という字の「名」という字はどこで目にしているか、などと推測するということである。

このような活動は一つ一つの文字を単純に覚えこむことを目的としてはいない。そのために時間を要するが、学習者が必要な情報は、それぞれ異なるのが当たり前で、その中で知りたい情報を自身の文脈の中で自主的に解決していけることが望ましいと我々は考える。それが結果的に推測能力の向上へと繋がり、ひいては学習者の自立へと繋がるものだと思える。

6. まとめ

読む活動と一言で言っても、読むもの、読む目的によって多様な読み方があることは明らかである。本稿では、日本で生活する学習者のニーズに対応した教材から必要な情報を得るという活動を通して、教材以外の素材、すなわち実際の言語活動で目にする「書かれたもの」を読む際にも利用で

きる読み方のトレーニングを行った授業例について報告した。この授業では、従来の初級用読解教材を使った授業でよく行われる精読とは異なる読み方が要求される。つまり、多くの情報が書かれた素材の中から必要な情報のみに焦点を当て、他の部分を読み飛ばすという読み方が必要となる。

また学習者のニーズに沿い生活に密着した内容の教材を扱うことにより、学習者の読めるようになりたいという欲求を引き出すことができ、自主的な学習活動を促す一助になったのではないかと考える。生教材を扱った授業は、それぞれの教師が個々の学習者の要望に応じて行っている場合もあるだろう。しかし、教材の使用方法によっては、単なる生活情報の提供、あるいは語彙を増やすための活動になってしまいがちである。そこで、本稿では情報提供のみならず、成人学習者が母語において保持している周辺知識・既知知識や推測能力を利用し学習者が自立した読解活動を行うための基礎づくりの指導にも重点をおいた。

今後は、学習者のニーズ調査をさらにを行い、実生活における読む活動に即した教材の開発を試みたい。さらに、本実践の有効性を検証するための評価法についても検討していきたいと考える。

注：

- 1) 『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』では各課の最後にある「問題」の読解教材がその課で学習した文型を使った文章を読む練習問題となっている。また、『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』に準拠した読解教材の『みんなの日本語初級Ⅰ 初級で読めるトピック25』『みんなの日本語初級Ⅱ 初級で読めるトピック25』や『文化初級日本語』に準拠した『楽しく読もうⅠ』においても、読解問題は各教科書の課の学習項目に対応したものである。
- 2) 一般日本語コースは、読解、文法、会話、漢字、作文のクラスに分かれており、すべて半年のコースである。これらのクラスの中から学習者が受けたいクラスを選ぶ。読解クラスは週に1回(90分)である。
- 3) 集中日本語コースは、大学院の予備日本語教育で15週間のコースである。読解のほかに、文法、会話、作文、漢字、LLがあり、読解は週に1回(90分)である。
- 4) アンケートの調査項目は、本稿執筆者らの授業の中で以前学習者から挙げられたニーズを元に作成したが、日本での生活において学習者自身が実際に目にするであろう読み物すべてが反映されているとは限ら

ない。また、来日間もない学習者に調査を実施したことから、日本で
の生活に慣れていないということも調査結果に影響を与えると考えら
れる。学習者のニーズ分析は今後検討しなければならない点の一つで
ある。

参考日本語教材：

スリーエーネットワーク編(1998)『みんなの日本語初級Ⅰ』スリーエーネッ
トワーク

スリーエーネットワーク編(1998)『みんなの日本語初級Ⅱ』スリーエーネッ
トワーク

文化外国語専門学校編(1987)『文化初級日本語』凡人社

文化外国語専門学校編(1996)『楽しく読もうⅠ』凡人社

牧野昭子・沢田幸子他(2000)『みんなの日本語初級Ⅰ 初級で読めるト
ピック25』スリーエーネットワーク

牧野昭子・沢田幸子他(2001)『みんなの日本語初級Ⅱ 初級で読めるト
ピック25』スリーエーネットワーク

参考文献：

池上摩希子(1996)「読解ストラテジートレーニング・プログラムの評価」
『中国 帰国者定着促進センター紀要第4号』pp.1-45

池上摩希子(1993)「教科書読解に結び付けるための初級読解指導」『中国
帰国者定着促進センター紀要第2号』pp.126-135

市川明美・梅田悦雄・山田智久・富田麻知子(2006)「初級者を対象とし
た新しい読解教材の開発」『日本語教育方法研究会会誌』vol.13, No.
1 pp.14-15

宮谷敦美(2005)「読むための日本語教育文法」野田尚史『コミュニケー
ションのための日本語教育文法』pp.167-185 くろしお出版

Tomlinson, B. (1998) *Material Development in Language Teaching*. UK: UP.

謝辞：

本研究は2006年3月に行われた日本語教育方法研究会でのポスター発表
の内容をまとめたものである。発表の際、多くの興味深いご意見をいただ
いた。ここで、感謝の意を表したい。

いちかわ あけみ, うめだ えつお, とみた まちこ, やまだ ともひさ
(留学生センター非常勤講師)

Class activities to answer the needs of learners

--- Examples from experimental reading classes ---

ICHIKAWA, Akemi, UMEDA, Etsuo, TOMITA, Machiko,
and YAMADA, Tomohisa

Reading activities for beginners have generally been taught through application exercises of grammar. These sort of activities alone are not sufficient especially for learners in Japan because the activities are not authentic nor suitable for actual reading in their daily life.

We therefore have been trying to develop reading activities with materials useful for students' daily life. The plan is based on data drawn from needs analyses, which were conducted on students attending reading classes in the General and Intensive Japanese Courses at the International Student Center, Hokkaido University. Our goal is to include in our reading classes more activities based on the students' needs. We also stress the need for reading activities which encourage students to use their background knowledge and guessing abilities to read texts containing unfamiliar vocabulary or sentence patterns. Such activities, we believe, can better enable students to undertake independent study outside class.